棒読の水無月

みず色 不如帰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
棒読の水無月

【Ｎコード】
Ｎ８１６９Ｗ

【作者名】
みず色　不如帰

【あらすじ】
少し未来の話

近年、魔術と言う存在が証明され、全国の学校の科目に『魔術』が加えられる。
その中に、魔術を重点的に教える国が設立した『国立天照学園』と言う学園があった。

その天照学園、通称アマガクに通う、自らを背景（モブキャラ）と認識している少女、十泉坂（トミサカ）　暁（アキラ）と、感情無く無機質に話す白髪の少年。この二人はこれから起こる様々な出来事に巻き込まれていく、学園ものファンタジー。

1話　棒読の入学式（前書き）

初めての書き物です。初心者ですが宜しくお願いします。

1話　棒読の入学式

２１０３年４月１０日（火）
入学式

国立天照学園。
近年証明された魔術を広める為の国が設立した小中高大一貫の全寮制の学園である。因みにこの学園が設立された際、元々あった学校はかなりの数が吸収されたのと、異界からの亜人留学生も多く来ている為、生徒人口は２万人強である。

広々とした体育館、ヒノキの香りが漂い、傷の目立たない小綺麗とした木製の床からは建設からの年月は然程感じられない。ずらりと規則的に並んだ未だ汚れの目立たないパイプ椅子には黒と青を基本としたブレザー、天照学園高等部の制服を着用した新入生が着席している。そこでは中等部から高等部へ上がるための始業式と呼ばれる入学式が行われ、立体映像により校長と呼ばれる学園長の長ったるい挨拶が行われている。

入学生８１４名。
その中の黒髪のポニーテールに背丈はやや低めの少女、十泉坂（トミサカ）　暁（アキラ）はパイプ椅子に座り、眠そうな目を擦りながらも、早く話終われと念じていた。

十泉坂　暁はこれといって目立った所はない、運動能力は平均より少し上、取り立てて人望があるわけでもなく、特殊な能力があるわけでもない、むしろ学力は平均を大きく下回り複数の赤点を抱える

始末、自身をモブキャラ（背景）と自覚している。しかし1つだけ特殊な趣味がある、本人曰く“星鑑賞”夜の8時～明け方までかけて女子寮の屋根の上にて星を鑑賞する、望遠鏡ではなく肉眼で見る事に変なこだわりを持ち、睡眠時間は授業中であり成績が悪いのは必然と言えば必然である。

１０：１５

校長（学園長）の長話も無事終わり、十泉坂　暁はクラス表を黙視していた。

（２６クラスもあるのか、相変わらず多いな…）

クラスは全部で２６ありＡ～Ｚで分けられている。クラス分けは毎年コンピューターが完全ランダムで決めている為毎年知らない顔ばかりが揃い、２６クラスのなかから自身の名前を探すのも一苦労である。若干うなだれながらも名前探しに苦戦していると

「おっはよ～！アキラ！！」

無駄に高いテンションで“朝の挨拶”が飛んできた。

彼女は十泉坂の親友
稲沢陽華（イナサワ ヨウカ）黒と青を基本としたブレザー、標準より少し短めのスカートを着用し、短めの茶髪を後ろで軽く結んだ髪型でポニーテールと言うには少し長さが足りていない、スポーツ好きといった印象を受ける少女である。十泉坂とはコンピューター完全ランダムで決めているにも関わらず、中学1年から全て同じクラスと言う最早腐れ縁

レベルの付き合いである。あだ名はヒバナ。

「おはよう、ヒバナ。朝からテンション高いな」

「まあ、そこは若さってやつ？☆」

ならばテンションが常にやや低めな自分はどうなんだろう、と十泉坂は少し本気で悩む。

「ヒバナ、自分のクラス分かったか？」

「D！アキラも同じだよ☆」

コンピューター完全ランダムと聞いていたが最早疑わしいな、と疑念を抱きながらも稲沢が同じクラスな事にホっとした心持ちの十泉坂である。

数時間前

０７：４５

とある駅前。

朝だけあって様々な目的を持つ人々が行き交っている、職場への出勤、学校への登校、あるいは終電に間に合わず朝までの時間を喫茶店かなにかで潰していた人もいるかもしれない。そんな中でチンピ

ラ風の男と天照学園高等部の制服を着た少女が話していた、いや男が一方的に少女に絡んでいるといった方がいいかもしれない。

少女の名の名は山吹（ヤマブキ）　暦容姿端麗で腰まで伸びた黒髪に青いカチューシャを付け、標準よりやや長めのスカートを着用している為、大和撫子という印象を受ける美少女である。

チンピラ風の男の名は　中田川（ナカタガワ）　仁（ヒトシ）金髪パーマをかけた髪、頬に縫い傷があり、サングラスにあごひげと、かなり厳つい容姿をしている。

（どうして、こんな事に・・・？）

山吹は周りに目を向けるが、通行人は目を合わせないように顔を背けるだけで助けようとはしない。そうだよね、と山吹は周りに希望は無い事を改めて思いしる。それはそうだろう、普通自分から厄介事に飛び込もうとする人なんてそうそういない、それも見ず知らずの人の為になんて、おとぎ話じゃあるまいし居る筈がない。

「おい、さっきから黙って何考えてるか知らねぇが、ついてくる決心はついたって事で良いんだよな！？」

そんな決心つく訳がない。しかし、恐くて何も言えない自分が惨めで仕方ない。山吹に出来る事はただ沈黙を貫くしか無かった。しかし・・・

「失礼だが、その制服、天照学園の生徒か？」

ただ平坦に響く声。そこに居たのは、少し異様な少年だった

身長は１６５ｃｍ程だろうか、アクセント一つない真っ黒なロングコート、革手袋、ズボン、靴、全てが黒で統一されている。それに対し髪は白く、両目は赤い、肌も不自然な程色白である。年齢は正確には分からないが１４、５歳位に見え、感情の無い表情をしている。

山吹は彼の取っている行動の意味が理解出来なかった。助けようとしているのだろうか、だとしたら何故？見ず知らずの人間を助けようなんて考える筈がない。

「おい、ガキ！見て分かんねぇのか！？今は俺が話てんだよ、今すぐ消え、

「天照学園への行き方を聞きたいんだが、」

白髪の少年は構わず続ける。　ブチッ　チンピラの血管の切れる音が聞こえた。

次の瞬間少年は胸ぐらを掴まれ、動きを封じられ、今にも殴られそうな状況である。しかし、少年の表情に変化はなく、ただ無機質にチンピラの目を見据えている。

「クソガキ、てめぇ大人をなめてんのか？」

先程まで目を背けていた通行人は足を止め、所謂野次馬状態と化し周りに集まり出している。

対して少年の取った行動は単純だった、胸ぐらを掴んでいるチンピラの左手首を擦るように撫でた。

「ーーーッ！！？」

チンピラは声にならない悲鳴をあげながら左手首を抱え、うずくまる。一体何をしたのだろうか、少なくとも山吹にはただ左手首を軽く擦っていた様にしか見えなかった、だからこそ薄気味悪さを感じる。

しかし何故か恐怖は感じなかった。今恐怖を感じているのは恐らくチンピラの方であろう。

「テ、テメェ魔術師って奴か？・・・その顔覚えたぜ・・・覚悟しとけよ！」

そう言い残し全力疾走で去っていった。周囲の野次馬からは雑魚キャラ定番の台詞だな、という空気が感じられる。山吹は気が抜けたのかその場にへたり込んでしまっている。

「もう一度聞くが、天照学園への行き方は分かるか？」

白髪の少年は構わず質問を続ける、あくまでも平坦に無機質な口調で。

「は、はい。分かります。それより、あの・・・ありがとう、ございました」

山吹はぺこりと頭を下げ感謝の気持ちを表すが、どこかぎこちない。

「礼を言われる筋合いはない。助けたつもりも無い。あの男には質問をするのに邪魔だったんで、退場してもらっただけだ」

この少年は本当に自分の都合で行動し、その過程でたまたま山吹を

助ける形になっただけのようだ。しかし、動機はどうであれ動くと動かないでは根本的に違う、少なくとも山吹はそう考えた。

「いえ・・・、それでも助かりました。・・・あの、その・・・・・・・」

俯き気味でもじもじする少女に、？マークの白髪の少年。実は山吹は重度の男性恐怖症であり、まともに話す事はおろか目を合わせる事さえ困難を要する。先程まではチンピラの恐怖で麻痺していたが、その恐怖が薄れてきて目を合わせる事も出来ずにいる。

・・・・・・・。

長い沈黙の末

「・・・、話す事が難しいか・・・話し掛けて悪かった。他を当たるとする」

そんな事情を知らない少年は業を煮やし、その場から立ち去ろうと駅内へと歩いて行く。

本当にこのままで良いのだろうか、この少年には動機はどうであれ助けて貰った、恩人と言っても過言ではない、その恩人に対してこれじゃあんまりではないだろうか。

「ぁ、あの！」

気付いたら引き留めていた。せめて天照学園への行き方位は伝えなくては、その思いが突き動かしていた。

「まだ何かあるのか？」

足を止め振り返る少年。

「ぁ・・・あの、その・・・が、学園への行き方を、・・・教えさせて下さい！」

いつの間にか野次馬は消え、人々は自身の日常へ各々戻っていた。
ぽかんと僅かに口を開けている白髪の少年、僅かな沈黙の末

「・・・それは助かる、教えてくれ。」

１０：３０

天照学園第１１校舎

天照学園には校舎が１５あり、それぞれ小中高大と校舎１つに１学年と分けられている。
扉に１ーＤと記された教室では簡易的な自己紹介が行われていた。
その中の黒髪ポニーテールの少女、十泉坂　暁は見事に撃沈し、熟睡していた。何故こうなったのかというと、彼女特有の趣味である“星鑑賞”を入学式の前日も空ける事なく実行し、結果殆ど徹夜で

入学式に出席、今に至る。

（ちょ、アキラ！そろそろ順番だよ、こう言うのは第一印象が大事なんだから！）

短めの茶髪を後ろで軽く結んだ少女、稲沢　陽華　は隣の席で夢の世界を満喫している十泉坂に自己紹介の順番が迫っている事を耳打ちするが、一向に目を覚まさない。

「次は・・・十泉坂、自己紹介しろ。」

そんなこんなしてる内に、順番が回ってきた事を1年D組の担当教員（♂）、米川（ヨネガワ）が告げる。

「ス、スイマセン、今起こします、・・・アキラー！自己紹介の順番来たってば！！」

何とかその場を取り繕おうと、十泉坂の肩を揺らしながら呼び掛ける稲沢。

「ぅ・・・ん、ウサギが、ウサギがサブマシンガンを持って・・・ムニャむにゃ」

・・・・・・・・。

十泉坂のかなりシュールな寝言に静まり返る教室。最早収拾不可能と判断し黙る稲沢。

「・・・、十泉坂はとばして次、中山。」

一体どんな夢を見ているのか激しく気になった担任米川だが、時間も押していた為次へ進めるのだった。

０８：３０

とある交差点、アクセント１つない黒いロングコートを着た白髪の少年は、信号待ちをしながら数十分前の事を思い返していた。

・・・・・・。

『す・・・すいません、、一緒に行くつもりだったのですが・・・、』

腰まで伸びた黒髪に青いカチューシャをした少女、山吹　暦は急な父親からの電話により、家に帰る事になったらしい。どうやら急を要する様だ。

『気にする必要は無い。道順だけでも教えてくれると助かる。』

平坦に無機質に話す白髪の少年。

『そ、それは勿論！・・・ぁ、あの、良ければアドレスを・・・その・・・、』

『・・・、何故？』

『い、いえ、駄目ならいいんです、、、すいません、』

『別に不都合は無いが』

・・・・・・・。

道順を聞いた（ついでにアドレス交換）通りに進み、現在に至る。

（この信号を渡った後、坂を登って・・・）

「おい、クソガキ！」

（その坂を、登った先に門があると言っていたな、）

・・・。

「何か答えろ！！」

（・・・五月蝿いな。）

信号待ちをしている白髪の少年の背後には、数十分前に山吹から邪魔という理由だけで追い払った、チンピラ風の男。その男の後ろに仲間と思しきヤクザ風の男が５人、間違いなく先程の報復だろう。

「・・・まだ何か用か？」

平坦に無感情に答える白髪の少年。

「ちょいと事務所まで来てもらう。・・・まさかこの人数相手に抵抗しようとか考える程馬鹿じゃねぇよな？言っておくが、さっき左手にしやがった、魔術はもう通じないぜ！？」

自らの左手首を擦りながら、嘲り笑うチンピラ風の男。

「・・・何か勘違いをしてないか？左手首に魔術なんて使っていない。だた単に

・・・関節を外しただけだ。」

ドスッ　ドカッ　ドカッ

複数の鈍い音が響く

一瞬の出来事だった。チンピラ風の男、中田川　仁　のすぐ後ろに居たヤクザ風の男達5人はそれぞれ白目を向き泡を吹いて倒れ、それを見ていた中田川でさえも鳩尾（ミゾオチ）を強打され力なくその場に倒れ込む。中田川は何が起きたのか理解出来なかった。

（ふ、ふざけんな！何がどうなった！？こっちは5人も居たんだぞ！！？）

「おい」

「意識はあるよな？」

平坦に無機質に響く少年の声

中田川は心の底から恐怖した。目の前に居るのは、５人を一瞬で地に伏せさせる化け物。
中田川もチンピラのなりをしているがヤクザの端くれである。自身のメンツ、組の大紋、様々のモノを背負っている。しかし、目の前に居る存在は余りにもイレギュラー過ぎた。

「じ、自分が何したか分かってんのか？テメェが手ぇ出したのは、あの“五月雨組”だぞ！？」

“五月雨組”関東最大の極道組織“平凰会”の傘下組織の１つであり、悪い噂の絶えない集団である。
「テメェが伸した奴は俺も含め全員“五月雨組”の構成員だ、つまりこの瞬間からテメェは“五月雨組”に追われる事になんだよ。なんでそんな平然としてられる！？」

恐怖から自暴自棄になり叫ぶ中田川。

「それは困った、・・・そうだな、さっき言っていた事務所とやらに案内しろ。」

平坦に、感情なく無機質に

1話　棒読の入学式（後書き）

最後まで読んで頂いた方、真に有難うご座います。筆者には文才が無いため、次の話の完成にどれくらい掛かるかは不明ですが、なるべく早く書こうと思っています。

前書きでも書きましたが、今回初めての書き物なので、右も左も分からない状態です（笑

良ければ感想や気付いた事をコメントして頂けると幸いです。他にも誤字、脱字、文字化け等がありましたら、ご報告お願いします。

2話　棒読の出会い（前書き）

始めに、この小説はフィクションです。実在する団体、組織、個人とは一切関係御座いません。同一名の人物、組織が登場したとしても全くの偶然です。

1話の『棒読みの入学式』から見てい方には話の内容が繋がらないかと思われます。

2話　棒読の出会い

天照学園高等部学生寮。

天照学園の敷地は直径約１０ｋｍと広大で山々に囲まれている。校舎と学生寮の距離は離れている場合が多いが、敷地内には料金不要の電車やスクールバス等が配備されているため、登下校に不自由はない。
高等部学生寮は天照学園の南西部に位置している。

４月１０日（火）

１９：３０

太陽は沈み、藍色に染まった夜空には無数の星々が輝き、その中心に一際大きな輝きを放つ三日月が君臨している。学生寮の窓から明かりが疎らに漏れ出している。

ピピピピピピピ

高等部女子寮の３０７号室で、目覚まし時計が高らかに鳴り響く。

ピピピピピッ　カチ・・・

「・・・・ぅむ、」

３０７号室の居住者　十泉坂（トミサカ）　暁（アキラ）起床。

十泉坂　暁には特殊な趣味がある。それは日が沈んでから明け方まで、星を鑑賞する事である。その『星鑑賞』は今日も漏れることなく実行される。

（・・・まだ寝たりないが、星を見る為我慢だ・・・！）

寝起きの為、普段ポニーテールの髪はおろされ、所々に寝癖がある。

むくりとベッドから起き上がり、どこかぎこちない足取りでシャワー室へ向かう十泉坂。

ブツッ　『ーーうです。次のニュースです、今朝９時頃、“五月雨組”事務所にて銃撃戦があった模様です。３４名が病院に搬送され、内７名は重傷です。警察では勢力同士の抗争ではないかとーー』

どうやらＴＶのリモコンを踏んでしまい、電源が入ったようだ。

（・・・五月雨組って確か近所だな、随分と物騒な話だ）

他人事に考えながらも電源を消し再びシャワー室へ向かう十泉坂だった。

２０：０５

天照学園敷地内中央に西洋風のデザインの高さ５０ｍはある細長い塔がそびえ立っている、屋根が尖っている為、鉛筆を思わせる見た目で、生徒からは愛称として『鉛筆塔』と呼ばれている。『鉛筆塔』最上階には校長室と呼ばれる学長室が存在し、関係者以外入る事は許されていない。
その学長室に２つの人影があった。

「来たかね、随分と遅かったじゃないか」

白髪の目立つ長い髪、長い髭を蓄え、温厚そうではあるが、どこか威厳と風格のある老人が窓の前に立ち、もう一方の人影を見据えている。
彼は天照学園理事長兼学園長であり、名を　博凪（ハクナギ）　時重（トキシゲ）という。

「今日中に来れば良かった筈だが？」

平坦に無機質に答える声。

声の主は、白髪に赤い瞳、アクセント１つない黒いロングコートを着用した見た目１５才の少年だった。

「君の事だから早めに来ると思っていたんだが」

「予想が外れて残念だったな、」

「まぁそんな事はいい。・・・ところで先程ニュースを見ていたんだが、ウチの近所にある『五月雨組』と言う組の事務所が潰されたらしい、君・・・何か知っているかい？」

「・・・・・・、」

博凪は、はぁ、と深い溜め息をつく

「こちらの情報網を甘く見てもらっては困る・・・」

半ば呆れながら呟く。

「ここは平和の国、日本だ。前の国の常識は捨ててもらいたいね」

「拳銃やナイフを普通に持ち出してくる国を平和とは言わない。」

「それは彼等が少し特殊な人間だからだ、一般人はそんな物騒な物を持っていない。・・・要するに、あまり騒ぎを起こすべきじゃない。“私”にとっても“君”にとってもね」

日本には『銃砲刀剣類所持等取締法』略称『銃刀法』が存在し、銃器を所持する人は極端に少ない。そのため銃撃戦など珍しいを通り越して最早伝説級の産物である

「・・・いい加減“契約”について話をしたいんだが」

いつまでも説教を続ける博凪に対し、僅かな苛立ちを見せる白髪の少年

「それを今話してる。とにかく、銃撃戦はやり過ぎだ」

銃撃戦と言っても白髪の少年は銃を持っていなかった為、一方的に撃たれていただけなのだが、問題はそこではなく、騒ぎを起こした事にある

「・・・、説教なら自分の生徒にしろ」

普段、平坦に話す少年も僅かにウンザリした口調で話す

「それは都合が良い」

「・・・・？」

「水無月（ミナヅキ）　理王（リオ）。今日から君は、天照学園の生徒だ」

２１：１３

高等部女子寮の屋根上にて、黒髪ポニーテールの少女　十泉坂　暁は特殊な趣味である『星鑑賞』を満喫していた。

ここ天照学園は周りが山で囲まれているため、街では見えないような光の弱い星も容易に見ることが出来る。
現在、十泉坂は人生の幸福を感じていた

コツ　・・・　コツ・・・コツ・・・

その時、十泉坂の背後で足音が聞こえた

「・・・・？」

振り返ると人影があるが、暗くて姿はよく見えない。せいぜい月明

かりで僅かに髪が白く反射しているのが確認出来る程度だ

「失礼ですが、ここの寮生の方ですか？」

平坦に響く声。声色から少年という事が伺える

「・・・そうだが、・・・一応聞いておくが、あんた男だよな？」

「そうですが、それが何か？」

「ここは屋根の上だが一応女子寮だ・・・寮長に見つかったら殺されるぞ」

天照学園高等部女子寮寮長　楠（クスノキ）　綾呼（アヤコ）　元女子プロレスのチャンプで担当科目は体育（主に護身術）を教えている。現在２４歳（独身）髪は赤毛で長く、かなりの美人である。常時赤色のジャージを着用し、女子プロ時代も赤色の衣類を好んで着用し試合に望んでいたため『鮮血の女王（ブラッドクイーン）』と呼ばれ恐れられていた。他にも女子寮に忍びこんだ男子（空手の段持ち）をコブラツイストで絞め落としたと言う話は半ば伝説となっている。

「ずいぶんと物騒な寮長ですね」

ブブブッ　ブブブッ　ブブブッ

その時、十泉坂の携帯に着信が入った。入学式だった為マナーモードに設定していた様だ

（知らない番号？誰だろう、）

ピッ「もしもし」

『寮長の　楠　だ』

「！！？」

喉か干上がり嫌な汗がだらだらと流れる十泉坂

「・・・何故私の番号を・・・？」

『寮長をなんだと思ってる。寮生の番号くらいリサーチ済みだ』

「・・・、それで、何か御用でしょうか？」

『部屋にお前の姿が見えないが・・・今どこにいる？』

楠の言葉１つ１つがまるで死の呪文の様に聞こえる

「や、屋根の上で星を見てます・・・」

『それは、本当か？』

「・・・はい、」

『なら都合が良いな、今探している奴がいる。特徴は白い髪で名前はミナヅキ　リオで男だ。屋根の上から探して見つけ次第報告しろ』

十泉坂は現在隣に居る白髪の少年に目を向ける

「・・・、その彼は・・・何をしたんですか？」

『お前が知る必要はない。』

「・・・見つけ次第報告します」・・・ピッ

「どうか、しましたか？」

お互い顔は暗くてよく見えないが、十泉坂の異変を感じたのか、心配する素振りを見せる白髪の少年

「・・・そ、そう言えば、名前聞いてなかったな、十泉坂　暁だ」

目の前に居るのは恐らく寮長に追われているであろう『ミナヅキリオ』だが、念の為名前を確認する十泉坂

「水無月（ミナヅキ）　理王（リオ）です」

・・・・・・。

ビンゴだった

「・・・・、いきなりなんだが、あんたウチの女子寮の寮生に対して夜這いでも仕掛けたのか？」

「急になんですか？」

予想通りと言えば予想通りの反応だが、返答によっては寮長に引き渡さないといけない

「・・・質問が悪かったな。お前はここ女子寮に何しに来――ッ！！！」

十泉坂は背筋が凍りついた。気付いてしまったのだ、白髪の少年、水無月の後ろに赤のジャージを着た、赤い髪の女性、かつて『鮮血の女王』と恐れられた寮長　楠　綾呼が立っている事に

「面白い事やってるな、十泉坂。様子が変だと思い来てみれば、まさか密会とはな」

楠　綾呼は笑っていた、たがその笑顔が逆に恐い

「い、いやっ、これは・・・」

何もやましい事はないのだが、状況が状況なだけに、どう説明すれば良いのやら分からない十泉坂

「まぁこの際そんな事はいい」

寮長は水無月に目を向け

「君が水無月か、学園長から話は聞いている。もう1度、男子寮に

行ってみなさい」

寮長は白髪の少年水無月に対しコブラツイストをかける事も殴りかかる事もない、ただ男子寮に行くよう指示をしただけだった。どうやらやましい事をして追われていた訳ではない様だ

「・・・分かりました。十泉坂さんも、お休みなさい」

ぺこりと頭を下げる水無月

「あ・・・あぁ、お休み」

白髪の少年水無月の去った後、いまいち状況の理解が出来ていない十泉坂は寮長に対して質問を投げ掛ける

「・・・寮長、いまいち状況が掴めないんですが、」

「・・・彼は水無月　理王、留学生で“ついさっき”天照学園高等部に配属された、学年は1年だ。彼は学園長に寮で暮らすよう指示され、聞いた号室へ向かう為、男子寮に入ろうとした。が、ほんの1時間前に学園に入学した為書類が追い付かず、彼の名前は学生名簿に載っていなかった。だから男子寮寮長は水無月を追い返し、水

無月は路頭に迷っていた、そこでお前と出会った訳だ。・・・他に聞きたい事は？」

すらすらと答える寮長　楠。また『お前が知る必要はない』等と言われると思っていた十泉坂は拍子抜けする

「あー・・・えっと、とても分かりやすい説明ありがとうございます、、、」

「さぁ、今日はもう遅い。部屋に戻って寝なさい」

「え、いや、私は今から活動時間で・・・」

「明日も学校だ。寝ろ」

「ち、遅刻とかはしませんから！」

「・・・もう1度言わせる気か？」

「・・・・・・、・・・寝かせて頂きます・・・」

半ば強制的に３０６号室へ帰される十泉坂だった

２１：２８

天照学園高等部男子寮

十泉坂、楠と別れた白髪の少年水無月は、男子寮寮長　鳩部（ハトベ）に部屋に案内されていた

「いやー、さっきは悪かったな。」

事情を知らず追い返してしまった事を詫びる鳩部

「気にしてませんよ」

「そういや、楠先生と会ったんだよな、恐かったろ？」

ガハハ、と豪快に笑いながら話す鳩部。無表情な水無月とかなりの温度差がある

「お！、ここだ水無月、ここがお前の部屋だ」

五階廊下一番奥の部屋。扉には５０９の数字

「５０９号室ですか」

「俺（寮長）の部屋は一階の１０１号室だ、分からない事があったら、いつでも聞いてくれ」

そう言うと鳩部は鍵を渡し、自らの部屋へと帰っていった

部屋の中はがらんとしていた、あったのは支給された革のソファー、ベッド、他に生活の出来る最低限の設備がある位だ。独り暮らし用の狭いスペースだが、家具が殆ど無いため広く感じる。

水無月　理王は学園長との会話を思い出していた

・・・・・・・・・・

『水無月　理王。今日から君は、天照学園の生徒だ』

『・・・生徒、だと？』

『そう生徒だ。学年は、・・・そうだな、高等部に入って貰おうか』

『笑えない冗談だ、』

『冗談ではない。』

『じゃあ何か、明日から私は平和ボケしたガキ供と一緒になって、楽しい授業を受けると？』

無感情の中に僅かな苛立ちを帯びた言葉をぶつける水無月

『そこは任せるが、“見える範囲の生徒をあらゆる災害”から守って欲しい』

『・・・、それが“契約”内容か？』

『まぁ・・・そうだな、それが“契約”だ』

『ならば私を生徒にする理由がない、・・・何を企んでる？』

『ほっほほ。さぁ、この“契約”受けるか、それとも断るか、・・・どうする？』

『・・・・・・・。』

『ワシの考えが正しければ、君は断らない・・・いや、断れない。違うか？』

『・・・、狸親父め、・・・・・良いだろう。その“契約”受けてやる』

相変わらず平坦に無機質に話すが、その中から僅かに侮蔑の様な物が感じられる

『そう言うと思っていた。』

博凪は満足そうな笑みを浮かべ、自らの長い髭をいじる

『ところで・・・初めて会ったときは敬語だったが、今は随分と口調が変わっているね』

『・・・“契約”中は、特定の人物以外は敬語で接する決まりだ』

『ほう、興味深いね。他にも何か決まりがあるのかい？』

『説明が面倒だ。自分で調べろ』

・・・・・・・・・

（見える範囲の生徒を守れとは、人間とは妙な願いばかりをするな。
・・・やはり人間は面白い）

窓から月明かりの差し込む家具の少ない部屋で、白髪に赤い瞳、アクセント1つ無い黒いロングコートを着た少年は、無機質に無感情に僅かな微笑みを見せた

2話　棒読の出会い（後書き）

最後まで見て頂いた方、この様な駄文を読んで頂き、誠に有難う御座います。もし差し支えなければコメントを頂けると幸いです。

筆者に最近あった出来事は、お墓参りに行った位です、とても内容の薄い人生を歩んでいる気がしますが、気にしない事にしています（笑

3話　棒読の平凰会（前書き）

始めに

この小説はフィクションです。実在する組織、団体、個人とは一切関係ありません、同じ名前があったとしても全くの偶然です。

3話　棒読の平凰会

４月１１日

天照学園第１２校舎

『１２校舎』は高等部２年生の校舎であり、１年生の校舎『１１校舎』の直ぐ南に位置する。さらに『１２校舎』の南には『１３校舎』、３年生の校舎が存在する。
天照学園は生徒人口が多い為１学年に１校舎が割り当てられている。
その為、先輩後輩と言った関係はかなり曖昧である

０８：０２

辺りには霜が降り、春先だが未だに肌寒く感じる朝、天照学園は山に囲まれている為霧が出ている。『１２校舎』、扉に２－Ｑと記された教室にて、規則的に並んだ机に、腰まで伸びた黒髪に青いカチューシャを掛けた大和撫子を思わせる少女　山吹（ヤマブキ）　暦（コヨミ）は１人椅子に腰掛け携帯電話とにらめっこしていた。

（・・勢いでアドレス交換しちゃったけど、どうメールすれば良いか分からない・・・）

名も知らぬ白髪の少年のアドレスを見つめながら、最初の一文に一晩悩んでいる山吹。そこに1人の人影が近付く

「こよみちゃ～ん、さっきから何を見てるのかニゃ～？」

猫なで声で背後から抱きつくツインテールの小柄な少女

「ッ！？　ミヅハ！？」

彼女は観月（ミヅキ）　瑞羽（ミヅハ）山吹の友人であり、2－Qに所属している。種族は『牙族』であり所謂、獣人であり異界留学生である、見た目は人間と全く変わらない。

「おやぁ？そノ『白い人』って誰？男か、男だナぁ、男ナんだろぉ～♪」

携帯のメール画面に記された『白い人』という文字を見てはしゃぐ観月

「ちち、違う・・・違わないけど、違うのミヅハ」

「おぉっと、、、カマを掛けたつもりだったんだけど、まさかマジで男だとはネ・・・」

申し訳無さそうな表情を見せる観月

「あうぅ、だから違うんだってば・・・」

「男性恐怖症のこよみがネ・・・お年頃ってヤツだネ～♪」

「だから、違うの！！」

遠い目をしている観月に対し、山吹は若干泣きそうである

「冗談冗談♪それで、その『白い人』の名前は分からないの？」

「・・・聞きそびれて、」

「ほほう♪名前は聞きそびれて、メアドをＧＥＴとは・・・こよみもやるネぇ♪」

「ミヅハ！」

「ナはは、冗談はさておき、もうメールはしたノ？」

「う、・・・どんな内容にすれば良いか、分からなくて・・・」

「こよみは堅くナりすぎだよ、・・・でもそノ恋、応援するよ♪」

「恋じゃないってば！！」

普段大声のあげない山吹の貴重なツッコミであった。

０８：４５

第１１校舎。扉に１－Ｄと記された教室にて担当教員米川（ヨネガワ）によるＨＲ（ホームルーム）が行われている。クラスが変わったばかりの為、先生への意見はおろかひそひそ話さえ全く無い。まるで、お通夜かお葬式の様な雰囲気だが、毎年の事で慣れているらしく担当教員米川は全く動じていない

「、報告は以上だ。・・・今日は起きてるな、十泉坂」

「・・・はい、」

黒髪ポニーテールの小柄な少女　十泉坂（トミサカ）　暁（アキラ）は睡眠時間は昼間で活動時間は夜という夜行性生活を送っているのだが、昨晩寮長に半強制的に寝かされた為、今日は珍しく目が冴えている。入学式の日まで寝ていた為、担当教員米川に『居眠り生徒』というレッテルを貼られてしまった様だ

「あー、それとこのクラスにもう1人仲間が加わる事になったから、皆仲良くするように」

入学式の次の日に転校生!?的な空気が教室に充満する

「転校生って訳じゃ無いぞ、書類の手違いでクラス名簿に名前が載ってなかっただけだ。・・・でも今日は来てない見たいだな・・・、」

ポニーテールの少女　十泉坂は昨晩の出来事がフラッシュバックする。昨晩、十泉坂は『水無月（ミナヅキ）　理王（リオ）』と名乗る白髪の少年と出会っ

ている。

（・・・いや、偶然だろ流石に、私は『モブキャラ』でそんな漫画やラノベ見たいな主人公（ヒロイン）的イベントがある訳が無い・・・）

十泉坂は自らを『モブキャラ』と認知している。それは特に飛び抜けた技能を持たない事も要因の１つだが、十泉坂はそれに劣等感を抱いている訳ではない、むしろ厄介事に干渉しない『モブキャラ』の生き方に誇りに似た感情さえ懐いている。

「確か名前は・・・」

担当教員米川は度忘れした様で、修正されたであろう出席名簿を確認している

「・・・、水無月　理王だ」

・・・・・・・・・・

ビンゴだった。

１１：４２

白髪に赤い目、アクセント１つない黒いロングコートを着用した少年、水無月　理王は現在、学園を休み、『平凰会』総本家の和室に正座していた。

『平凰会』とは、関東最大の極道組織であり、無数の傘下組織を従え、関東の裏世界を牛耳る存在である。

何故、水無月が『平凰会』総本家に来る事になったかと言うと、先日、水無月が『平凰会』の傘下組織である『五月雨組』の事務所を諸事情により壊滅させてしまった事を穏便な話し合いで解決するようにと、学園長からメールを受け取った為である

『平凰会』総本家

民間の建ち並ぶ郊外に一際大きな和風の屋敷が存在する。建築１００年以上は建っているかの様な、かなり年期の入った建物で、手入れが行き届いているのかボロボロといった雰囲気は皆無である。屋敷は高い塀で囲まれ、木製の立派な門が聳え、立て札には『平凰会』と刻まれている

（話し合いで解決するとは思えないが・・・）

水無月は和室に通され会長だか組長だかが来るのを待ちながら考える
どうやら学園長博凪は『平凰会』のトップと面識があるらしい。学園長が上手く取り計らったのか、敵の本拠地のど真ん中に居るにも関わらず、周りを大勢に囲まれると言った事は無い。

「お前か、時重の言ってた餓鬼は」

不意に背後から声が響く

振り返ると見た目３０代前半の男が水無月を見下ろす形で立っている
長い黒髪を後ろでくくり、顎に斬り傷がある。黒い羽織を着用し、
左手には日本刀が握られている、まるで武士の様な見た目である

「・・・貴方は？」

「人に名前を尋ねる時はまず自分から名乗るのが筋ってもんじゃねぇか？」

「・・・天照学園高等部生徒、水無月　理王」

「『平凰会』会長をしてる、山吹（ヤマブキ）　鳳（オオトリ）だ」

「学園長に話し合いでの解決を要求されましたが・・・貴方はどうするお積りですか？」

「・・・そのぎこちない敬語は止めろ。うざったくて仕方ねぇ」

「貴方に口調ににについて言われる筋合いは無いと思いますが」

「止めねぇと、殺すぞ」

なんて理不尽な男だ、と水無月は思う

「・・・まぁ、貴方が良いなら、私は構わないが」

「それで良い」

それでだ、と会長山吹　鳳は切り出す

「まず、娘の暦（コヨミ）を助けてくれた事、深く礼を言う」

深く頭を下げる山吹　鳳。それに対し水無月は何の事か分かっていない様で、頭に？マークを浮かべている

「？・・・何の話をしている？」

「暦だ、山吹　暦。俺はアイツの父親だ」

「だから、誰だ？」

「名前聞いてねぇのか。特徴は長い黒髪に青いカチューシャをしてる。」

確かに水無月　理王は昨日の朝、少女に絡んでいたチンピラ風の男を、追い払っている。
※詳しくは『1話　棒読の入学式』を参照

「・・・、あぁ、あの娘か。助けた積りは無いんだが」

「テメェがどんな思惑でやったかなんざ聞いちゃいねぇ。娘を助けてくれた奴には礼を言うのが筋だ」

「・・・」

「だが、テメェはウチ（平凰会）の傘下組織を潰してる、それもたった1人でだ。ケジメはつけて貰う」

山吹　凰から殺気立つモノを感じる

「・・・私にどうしろと？」

水無月はただ平坦に無機質に答える。表情には何の変化もなく、唯只無表情に無感情である

「本来なら、コンクリ風呂に浸かり海に沈められても文句は言えねぇ。・・・しかし、テメェには暦を救って貰った恩もある」

「・・・、何が言いたい？」

「一言俺に詫びろ。それでチャラにしてやる」

山吹　鳳は筋や仁義と言うモノを何よりも大切にし、守る様な古風な極道者である。組織を1つ潰した者を『一言の詫び』だけで許すなど本来あり得ない事だ

「断ると言ったら？」

「・・・テメェ、状況分かってんのか？」

鳳は警告するかの様に刀の柄に手を掛ける

「自分の部下の管理も出来ない奴に詫びる言葉はない」

その言葉が引き金となった

「・・・威勢のいい餓鬼は嫌いじゃねぇんだがな」

ヒュン、ドスッ！！！！

その刹那、空気を切り裂く音と畳の裂ける音が響き渡る。
山吹　鳳は常人離れした剣速で水無月の左肩から地面まで刀を降り下ろし畳ごと真っ二つにした・・・

様に見えた。しかし、水無月の身体は斬れていない、必要最低限の動きで文字通り紙一重でかわしている。

「居合いと言うヤツか・・・」

畳にめり込んだ刀を赤い目で見据えながら平坦に呟く水無月　理王

「・・・！、まさか避けられるとはな」

鳳は驚きの表情を見せ同時に微笑む

その時だった

「何してるのお父さん！！！！」

甲高い少女の声が響く
そこに居たのは、腰まで伸びた長い黒髪に青いカチューシャを掛け、天照学園高等部の制服を着た大和撫子を思わせる少女、山吹　暦だった

「暦・・・！、お、お前・・・学校はどうした？」

「学校はお昼まで！それよりどういう事か説明して」

水無月と鳳の間に入る形をとり暦は質問を続ける

「い、いや、これは違うぞ！別に本当に殺そうとかじゃなくてだな、その・・・ちょっと斬れば謝るかな、みたいな、」

先程まで剣を振り回していた男とは思えないうろたえ方をする山吹鳳。

「謝るって何を？この人は私を助けてくれたんだよ！？」

「そ、それはだな、・・・」

（・・・さっきとは別人だな）

先程から蚊帳の外の水無月は、唯只その光景を見る他なかった

とその時、勢いよく襖を開け放ち、急いでいる様子で1人の男が入ってきた。黒髪オールバックにサングラスを掛け、黒いスーツを着

こなした、見た目は極道と言うよりはマフィアの様な男である

「会長、お取り込み中の所失礼しやす。お嬢もお帰りでしたか」

それを見た暦は鳳の後ろに隠れしまっている

※山吹　暦は男性恐怖症である

「おい、コラ。暦が怯えてんじゃねぇか！その厳つい顔を向けんじゃねぇよ」

「・・・すいやせん。それで、お嬢を襲った奴ですが、『五月雨組』の構成員で現在入院してる様です」

「・・・！、『五月雨組』だと・・・？」

「へい。どうやら、『五月雨組』は“敵勢力”と繋がっていた見たいです」

『平凰会』会長山吹　鳳は一連の話が１つに繋がるのを感じた。

『暦を襲った犯人』
『五月雨組』
『敵勢力』
『事務所壊滅』
『構成員の男の入院』
『水無月　理王』
『自分の部下の管理も出来ない奴に詫びる言葉はない』

導き出された答えは『五月雨組』の裏切り

恐らく『五月雨組』は『平凰会』にスパイとして傘下組織入り、“敵勢力”に『平凰会』の情報を流していた。その過程で“敵勢力”は、『平凰会』の弱点が会長山吹　鳳の愛娘山吹　暦と言う事を知り、『五月雨組』に山吹　暦の誘拐を命令。山吹　暦を人質に今後を優位に進める計画だったが、水無月　理王と言うイレギュラー因子の出現により失敗し、その上『五月雨組』の壊滅と言う不測の事態まで起こる。そして、それを決定付ける発言を水無月はしている、

『自分の部下の管理も出来ない奴に詫びる言葉はない』

まるで全てを知っているかの様な発言

「・・・。水無月　理王、テメェ全て知ってたのか！？」

「全ては知らない。だが話の流れで予想はついた」

「・・・・・ッ」

凰は絶句する。ならば水無月　理王は感謝すべき対象であり、ケジメをつけさせるなんてもっての他である

「・・・、・・・・暦、部屋に戻ってなさい」

部屋に戻るよう促す鳳。一方、暦の方は話に着いて行けず、？マークを浮かべている

「で、でもお父さん、私が居なくなったら、またこの人に斬りかかるんじゃ？」

「大丈夫。パパの勘違いだった」

そう言いながら暦を部屋に戻す山吹　凰

「・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

長い沈黙の末、山吹　鳳が口を開く

「・・・、何故言わなかった？」

水無月は『五月雨組』が裏切っていると分かっていた。その事を鳳に話していれば、斬りかかられる事もなかったのかも知れない

「言った所で、結果は変わらない」

「・・・まぁいい、お前のつけるべきケジメはもう存在しねぇ。むしろ娘を助けた大恩あるテメェに斬りかかった俺こそケジメをつけなきゃならん」

「お堅い事だな。それに刀は避けた、問題ないだろう」

「そう言う問題じゃねぇ！！！」

返ってきたのは怒鳴り声だった

山吹　鳳は義理人情や筋、仁義と言ったモノを重んじる古風な極道だ、それを絶対に守る事を自分自身に誓っている。守れなかった場合はケジメを自身に課す、それが『平凰会』会長山吹　鳳の考え方である。

「・・・ならどうしたいんだ」

「俺を煮るなり焼くなり好きにしろ」

「断る」

「駄目だ」

「・・・我が儘な男だな」

半ば呆れながら呟く水無月

「そうしなきゃ、筋が通らねぇ」

「・・・・・、・・・・・じゃあ、自分の娘さんを大事にしろ。それが『ケジメ』とやらだ」

「!?、・・・テメェ、本気か・・・?」

水無月　理王は一体何を言っているんだ、山吹　鳳はその疑問で一杯だった。普通、自分を殺そうとした相手にそんな言葉を投げ掛けるだろうか

「なんだ、出来ないのか？」

「俺はテメェを殺そうとしたんだぞ！？」

「さっき自分で『殺す気はなかった』見たいな事言っていただろう」

「・・・本気なんだな」

「冗談を言う様な柄じゃない」

「・・・・・・、・・・・ク・・・クッククク、ふはははははは！！！」

山吹　鳳は笑う、楽しそうに、高らかに

「頭でもブツけたか？」

水無月はぽかんとした表情で若干本気で心配する

「お前、気に入った」

「は？」

「谷田部（ヤタベ）、上等な酒を持ってこい」

「へ、へイ！」

襖の向こう側から、いつの間にか居なくなっていた、サングラスを掛け黒いスーツを着こなしたマフィア風の男の声が聞こえる、名前は谷田部と言うらしい。

水無月の前と鳳の前それぞれに一杯の盃が置かれる

「・・・何をする気だ？」

急な事に、眉をひそめる水無月

「俺とテメェで、義兄弟の契りを結ぶ」

「・・・真面目な顔でふざけた事を言うな」

「安心しろ五分五分（互いに同格）だ」

「その言葉のどこに安心する要素があるんだ」

「俺は１度決めた事は曲げんぞ」

「・・・・・・」

まるで漫才の様なやり取りだが、彼等はいたって真面目だった

１２：００

『平凰会』総本家の門前にて、アクセント１つ無い黒いロングコートを着た白髪紅眼の少年、水無月　理王と、腰まで伸びた黒髪に青いカチューシャを掛けた大和撫子を思わせる少女、山吹　暦が話しをしていた

「・・・ぁ、あの、本当にすいませんでした！」

深々と頭を下げる暦。父の乱心（斬りかかった事）を詫びているのか、父の奇行（義兄弟の契りの申し出）を詫びているのか、或いはそのどちらもか

「気にしてませんよ・・・」

一方、つい先程彼女の父親と義兄弟の契りを交わした（交わされた）水無月は普段無表情だが現在は若干ひきつった表情を見せる

「そ、そう言えば・・・ぉ、お名前を聞いてませんでしたね。父に聞いたかも知れませんが。高等部2年生、ゃ、山吹　暦です」

暦は自然に聞いたつもりだが、かなりぎこちない

「高等部1年、水無月　理王です」

「ミナヅキ　リオさん・・・とおっしゃるんですか」

「えぇ、これから宜しくお願いします」

「い、いえ、こちらこそ。・・・先程から気にってたんですが、どうして急に敬語を？」

水無月は暦の父、山吹　鳳に言われた言葉を思い出す

『・・・そのぎこちない敬語は止めろ。うざったくて仕方ねぇ』

「・・・・。変ですか？」

「い、いえ！そんな事は、むしろとても平均的な日本語ですよ。」

「・・・おかしな点があったら指摘をお願いします。まだ日本語には慣れていないので」

その後、他愛ない雑談を交わし、２人は各々の日常へ戻るのだった

3話　棒読の平凰会（後書き）

この様な駄文を最後まで読んで頂いた方、誠に有り難う御座います。

最近、急激に温度が下がりましたね。衣替えの季節が一番体調を崩しやすい、筆者は若干崩しましたｏｒｚ

皆様も気を付けて

4話　棒読の科学者（前書き）

始めに、この小説はフィクションです。実在する組織・団体・個人とは一切関係ありません。

4話　棒読の科学者

４月１７日（火）

１２：３５

１１校舎

高等部１ーＤ教室

入学式から丁度１週間が経ち、入学当初ギスギスしていたクラスの雰囲気もそれなりにマシになった頃

黒髪ポニーテールの少女、十泉坂（トミサカ）　暁（アキラ）は現在、四時限目の授業を眠ることなく受けている

十泉坂は今まで活動時間は夜、睡眠時間は昼と言う学生にあるまじき生活を送っていたが、高等部の女子寮に入ってから生活は規則正しくなっている。

そうなった理由は、女子寮寮長　、楠（クスノキ）　綾呼（アヤコ）の存在が大きい。楠綾呼は春休みでダラけていた寮生達の生活態度を規則正しく一変させ、特に不純異性交遊の殲滅に全力を注いでいる。

現在行われている科目は十泉坂の複数抱える赤点の一角、生物学で

ある。
黒板には『ドラゴン』の種類とその生態についての説明がびっしりと書かれているが、アメーバの時点で既に理解不能だった十泉坂に理解出来る筈がない。それとは対照的に隣の席では短い茶髪を後ろで軽く結んだ少女が目を輝かせている。彼女は十泉坂の親友、大の『ドラゴン』ファンの稲沢（イナサワ）　陽華（ヨウカ）である。

そんな光景を他所に担当教科生物学の白衣を着た教員（男）は説明を続ける

「えー、『ドラゴン』には様々な種類が存在し、大きく『飛竜（ｖｏｌａｒｅ－ヴォラーレ）』、『這竜（ｃｒｅｅｐ－クリープ）』、『泳竜（ｎａｂｉｓ－ナービス）』の３つに分けられる。ここまでで、誰か質問は・・・」

「ハイ！私あります☆！！」

生物学の教員が言い終わる前に手を高らかに上げ、自己主張をする稲沢　陽華。

「・・・えー、それじゃ、稲沢」

「『古龍（ｖｅｔｕｓ－ウェトゥス）』の生態はまだですか☆？」

目をキラキラさせながらハイテンションな様子の稲沢

『古龍（ｖｅｔｕｓ－ウェトゥス）』とは千年単位の年月を生き、言語や魔術を習得し人知を超えた知識を蓄える『ドラゴン』の最上位である。しかし、現在まで個体が確認されておらず、伝説上の生物として扱われている。

「・・・残念だが、生物学に伝説は出てこない」

「！！！」

まるで、この世の終わりでも来たかの様な表情で固まる稲沢

キーン、コーン、カーン、コーン

その時、授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響く

「・・・えー、次の授業はマンドラゴラの解剖実習をする。耳栓を持ってくるように」

生物学担当教員はそう言い残し１－Ｄから去って行く、それと同時にクラスメイトの大半が食堂へと走り出す、教室には弁当派が残り

悠々と弁当を開いている。

そんな中、いつまでも固まっている稲沢

「ヒバナ（稲沢　陽華のあだ名）、放心中の所悪いが、弁当の時間だぞ」

話し掛けたのは、黒髪ポニーテールの少女、十泉坂　暁である。右手には弁当が持たれている。

「アキラ（十泉坂　暁の事）は、『古龍（ｖｅｔｕｓ－ウェトゥス）』っていると思う？」

いつもは語尾に☆を付けている稲沢だが、現在テンションが限り無く低い為付けていない

「・・・その、うぇとす？って何？」

「やっぱり、知らないか。アキラ星の事“は”よく知ってるのにね・・・」

「悪かったな、星の事“しか”知らなくて・・・」

そう言いながら十泉坂の視線はとある机に向けられる。

「?、何見てるの?」

十泉坂の視線に気付く稲沢

「いや、今日もに来てないな、と思って」

「・・・ああ、えっと・・・名前何だっけ、ミナ・・・ズキ?」

「水無月(ミナヅキ)　理王(リオ)。」

「そうそう、水無月君!確か書類の手違いがどうたら。そう言えば来てないね・・・アキラの知ってる人?」

「一応・・・」

「ほほう☆。で、どんな人?見た目は?種族は?イケメン?☆」

言い終わる前に稲沢はガタンッと立ち上がり、十泉坂を質問攻めに

する稲沢。先程まで放心していたとは思えない程、目を輝かせている

「まてまてヒバナ、少し落ち着け。一つ一つ質問しろ」

「じゃ、じゃあ、その水無月君とアキラは・・・どんな関係！？☆」

「どんな関係でもない！て言うか、さっき言ってた、見た目とか種族とかの質問はどこ行ったんだ」

「なーんだ、じゃあ見た目は？☆」

「・・・見た目・・・そうだな、髪の毛が白かった気がする」

「気がするって・・・、随分アバウトだね」

「そう言われてもな・・・」

十泉坂と水無月の出会った場所は女子寮の屋根上、それも夜だった為、顔はおろか服装も分からなかった、辛うじて確認出来たのは髪の毛が白っぽかった事位だ

「なら種族も分からないんだ、・・・口調とかは？」

「んー、・・・普通に敬語だったかな。強いて言うなら、話し方が平坦って言うか、敬語の言葉一つ一つを棒読みで言ってる感じかな」

「・・・・・・、・・・白髪に、棒読み敬語・・・」

稲沢は、とても小さな声で呟く。十泉坂への言葉ではない、どちらかと言えば独り言に近い

「どうした？」

十泉坂は、稲沢の異変を察知したのか心配する素振りを見せる

「・・・ん、なんでもない」

明らかに様子のおかしい稲沢。

「？」

「ほらほら、早く食べちゃわないと昼休み終わっちゃうよ☆」

机に広げられた弁当を指差しながら、陽気に話す稲沢。

端から見ればいつもと変わらない稲沢だが、十泉坂にはどこか無理矢理陽気に見せている様に見えた、しかし、無理に聞き出すのも気が引けた為、十泉坂は不本意ながらも自身の弁当へ箸を伸ばす。

その時

ビ――――――！

ビ――――――――！！

ビ――――――――――！！！

防災訓練でしか聞いた事のない警報がけたたましく鳴り響く

ガララララ、ガタンッ！・・・ガタン！、、ガタン！、ガタンガタンガタン！！！

教室、いや校舎内全ての窓に防壁（シャッター）が下り、校内の電灯は消え、隣に居る人の顔さえまともに確認出来ない程の暗闇に支配される。

窓の防壁（シャッター）は本来、火災時に生徒の避難後に下ろし、校内の炎から酸素を遮断する為に設置された装置であり、その為かなりの強度を誇る。

校内は漆黒の暗闇で覆われ、クラス中はパニックに陥り、悲鳴をあげる生徒までいる。

そんな切羽詰まった状況下の中、十泉坂　暁は冷静に稲沢　陽華の身を案じる

「ヒバナ、大丈夫か？」

「少し驚いたけど、大丈夫☆・・・でも、何が起きたんだろ」

こんな状況だが、稲沢はやや高めのテンションを維持している

（とにかく状況が分かるまでは、じっとしとくのが得策か）

１１校舎屋上

屋上の扉には鍵が掛けられ、生徒はおろか教員さえ立ち入る事が出来ない。しかし、そこには例外が存在した

白髪に赤い眼、アクセント１つ無い黒のロングコートを着用した少

年、水無月（ミナヅキ）　理王（リオ）は携帯電話で会話をしている。
校舎の敷地内だと言うのに制服を着用していない事から、授業に出席する気は全く感じられない

「要件は？」

『・・・いや、大した用事ではない。ただ、最近授業に出席しているかね？』

電話からは温厚そうな老人の声が聞こえる。
電話相手は天照学園理事長兼学園長の博凪（ハクナギ）　時重（トキシゲ）である

「・・・・・・授業への出席は“契約”内容には無かった筈だが？」
最近どころか一度も出席していない水無月は僅かに沈黙し、平坦な調子で答える

『・・・無論、強制はしない・・・しかし、気が向いた時は出席して欲しい。君はワシとの“契約”の前に天照学園の一生徒でもある』

「・・・気は向かないと思うが、心に止めておく」

『・・・、ところで今は１１校舎かね？』

「あぁ、屋上に・・・」

ビ――――――！

ビ――――――――！！

ビ――――――――――！！！

『「！？」』

けたたましく鳴り響く警報

『何が起きた！？一体何が・・・』ピッ・・・

携帯の向こうで何か言っていたが、水無月は無視して通話を切る

（警報・・・？）

ガララララララ、ガタンッ！・・・ガタン！、、ガタン！、ガタンガタンガタン！！！

次の瞬間、屋上にある鍵の掛かった扉に防壁の様な物が下り、それが引き金となるかの如く、様々な方向から防壁の下りる音が響く、まるで生徒を逃がさない様に出口を塞いでいる

（・・・次は壁か、作為的な物を感じるな）

水無月は扉に下りた防壁に手を置き、何かボソボソと何かを呟く

ゴォォォォォ！！！

次の瞬間、爆音とともに全長５ｍはある火柱が防壁から燃え上がる。

しかし、防壁に傷は無く、それどころか焦げあと一つ付いていない。

（無傷とは・・・一定値以上のダメージの無効化か、それとも炎に対し極端に耐性があるのか）

考えた末、もう一度別の属性の攻撃系魔術をぶち当てると言う結論に至り、再びボソボソと何かを呟き始める

「ほぅ、今のは『火柱（フランマエ・コルムナ）』だね」

不意にどこからともなく響く男の声

水無月は詠唱を止め振り返るとそこには、白衣を羽織った見た目２０代前半～後半の科学者風の男がが立っていた。

屋上には間違いなく水無月１人だった。唯一の出入口である扉も鍵が掛かっているし、それ以前に防壁が下りている為出入りは不可能。警報騒ぎの直後に出口を塞ぐ防壁、そして出てきたのは得体の知れない科学者。とても無関係とは思えない

「・・・、失礼ですが、どなたですか？」

水無月は平坦な敬語で尋ねる

「どなた?、見ての通り科学者だよ。・・・それとも“この騒ぎを引き起こした張本人”と言い変えた方が良いかな」

科学者はニヤニヤしながら愉しそうに答える

「それにしても、今の『火柱（フランマエ・コルムナ）』は見事だよ。炎系統の基礎魔法とはいえ、あそこまで強力な物はなかなか見れな・・・」

ズドーーーンッ！！！

突如、爆音が響き渡る。
科学者の足元で大きな爆発が起き、科学者は爆煙に包まれ、辺りには爆風が吹き荒れる

この一撃で、科学者は吹き飛んだ・・・様に見えた。

しかし爆煙が晴れると、そこには何事も無かったかの様に、佇む科学者の姿がある。
科学者には傷はおろか汚れ一つ付いていない。

「お次は“非詠唱”の『燃えゆる風』（フレーム・ウェントゥス）かい、炎系統と風系統の複合魔術を“詠唱無し”で発動するとは、君への評価を改めなければならないね」

防ぐ素振りも見せなかったにも関わらず、無傷でそこに立っている科学者に対し、水無月は無表情にその姿を見据えながら口を開く

「・・・立体映像（ホログラム）の類いか」

「意外と科学の知識があるじゃないか。しかし、残念ながら少し違う。」

チッチッチと人差し指を左右に動かしながら、語る科学者

「どちらかと言えば、仮想現実（バーチャルリアリティー）に近い。僕はここには居ない、しかし、君には僕の姿が見えているし、声も聞こえている。
仕組みは簡単、この屋上周辺の空気中には、大きさがウイルスレベルのナノマシンが充満していてね、君が呼吸をする事で体内に入り込み、酸素と共に血管をつたい脳内に侵入。そして目に写るモノを伝える為の電気信号に細工をして、君の脳内スクリーンに僕の姿を映し出している訳さ。つまり君は、僕が“見えている”んじゃない、“見えていると錯覚”しているのさ、同じ理屈で声の方も“聞こえると錯覚”している。僕はこれを『幻惑現実（イマジナルリアリティー）』と呼んでいる。因みにこれを制作したのは・・・」

「分かったから少し黙れ。」

聞いてもいない事をペラペラと話す科学者に対し、水無月は僅かに苛立ちを見せる

「・・・これは失礼、少し話に夢中になっていたよ。要するに、君がどんなに強力な魔術を仕掛けて来ようが、全くの無意味な訳だ」

「だからなんだ」

水無月は、まるで最初から答えの分かっている問題を解くような反

応を見せる

「・・・何？」

「どれだけ理屈を並べようと、結果は立体映像（ホログラム）と大差ない。私からの攻撃は通らないが、あんたからも攻撃出来ないだろ」

「クッククク、確かに。これが立体映像（ホログラム）だったら、そうなっていただろうね」

ドスッ・・・

「・・・ッ！！！？」

次の瞬間、水無月は右脇腹から激痛が走る。

見ると儀式用の短剣の様な物が深々と刺さっている

短剣の柄からポタポタと滴り落ちる生暖かい血液

（ッ・・・一体、いつ刺された・・・？）

「ほぅ、叫び声も上げず片膝さえ地に着かせないとは」

「ペッ、・・・何をした・・・？」

口から多量の血液を吐き出し、科学者を見据える水無月

「何をした?、さっき言っただろう、君の脳にナノマシンを潜り込ませている、と。つまり君の五感は僕の支配下にある、君は今、“痛いと錯覚”しているのさ」

「・・・この痛みも刺さった短剣もナノマシンによる作用か。成る程、理解した」

「理解した、ねぇ。理解した所で、君には何も出来ないと思うけど」

『雲に付き従いし天を舞う紫光の龍よ、』

水無月は呪文の様な物を唱え始める

「おいおい、話は聞いてたのかい?、僕への攻撃は一切効かない。例えどんな魔術だろうとね」

『我の号令の下、黒雲より大地に降り立ち、自らの存在を轟音により知らしめよ・・・』

水無月は科学者を無視し詠唱を続け

『紫落雷（トニトルス・ウィオラケウス）』

呪文を唱え終わった途端、屋上上空は黒雲で覆われ、ゴロゴロと雷鳴が響く

「いくら雷でも、幻である僕は倒せない。その位の判断は出来ると思ったんだがね」

科学者はどこか失望した様に嘲る

「・・・よく喋る科学者だな。知り合いにも科学者がいるが、あんた程喋らないぞ」

その言葉の直後、屋上に一筋の光が堕ち、それと共にけたたましい轟音が鳴り響く。

稲妻が堕ちた対象は、科学者・・・ではない。

対象は水無月　理王

水無月は自らの肉体に稲妻を浴びせた

「な、何を・・・！？」

科学者は水無月の行動が理解出来ない、遂に気でも狂ったのかと思われても仕方ない行動である

その時、『幻惑現実（イマジナルリアリティー）』で形作られた科学者の身体が、まるで古いビデオを見ているかの様に乱れる

「！！？、・・・ば、バかｎｊｆｇｚゐε、何ヲしタｇＺ∂ｄｌｐ！？」

科学者の声には内容が聞き取れない程のノイズが走っている

「・・・伝わるかは不明だが、一応何をしたのか説明してやる」

落雷をその身に浴び、常人なら死んでもおかしくない状況で、白髪の少年、水無月はよろめきながら話す。

「あんたは脳内に『電気信号に細工をするナノマシン』を潜り込ませた、と言ったな。電気に細工が出来る程の精密器機ならイレギュラーな電圧には弱いと踏んだ。そこで雷系統の上位魔術の一つ『紫落雷（トニトルス・ウィオラケウス）』を自身へ浴びせる事で脳内に侵入したナノマシンを攻撃した。脇腹に刺さっていた短剣が消えたと言う事は、どうやら効果があった様だな・・・」

「kψg侮Ttイタgи.jv・・・」

科学者は何かを言おうとした様だが、ナノマシンが完全に壊れたらしく、姿が消え、音声も聞こえなくなった

（・・・さて、この防壁をどうするか・・・）

水無月はよろめきながらも防壁に手を掛ける。

その時

「フラフラだねぇ。やはり落雷の直撃はキツかったのかい？」

「ッ！！？」

水無月は背後から左肩に手を置かれる形で静止する。背後に居るのは間違いなく先程の科学者である

「先程の『紫落雷（トニトルス・ウィオラケウス）』は見事だよ。まさかあんな使い方をするとは思わなかった」

水無月は動く事が出来ない。指先はおろか瞬きも出来ず、喋る事もままならない状態にある

「動けないだろう。これも科学の力なんだけど、先程の様に構造を話すと、また攻略されかねないから、説明は省くよ」

静寂の中、科学者の声だけが響く

「まず、僕の目的だけど、警報を鳴らし防壁を下ろし、校舎の内と外で完全に分断したのは君を校舎内に閉じ込める為でね。『幻惑現（イマジナル・リアリティ）

実』で気を失わせて、校舎内部に放り込む・・・筈だったんだけど、思わぬ反撃を食らって予定が少し狂ったよ。まぁ、この位なら修正は可能だ」

水無月は無表情に科学者の言葉を聞く・・・いや表情さえ変える事さえ出来ないのかも知れない

「さて、“ロイ・フラット”・・・いや、今は水無月　理王だったかな。君の敗因は“僕自身”が近くに居ないと言う固定概念を抱いたからだ。」

白髪の少年、水無月　理王の姿は消えた。まるでこの世から存在が消えるかの様に

4話　棒読の科学者（後書き）

最後まで読んで頂いた方、この様な駄文を読んで頂き誠に有り難う御座います。

筆者は最近、毎朝「寒っ！もう冬なんじゃ・・・？」的な事を考えます（笑

しかし、昼になると結構気温高かったり、日差しが強かったりと、温度のギャップが激しいですね。

5話　棒読の暗闇廊下（前書き）

まず始めに、

この小説はフィクションです。実在する組織・団体・個人等とは、一切関係ございません。

5話　棒読の暗闇廊下

４月１７日（火）

高等部の校舎は１１校舎、１２校舎、１３校舎の３校舎あり、全ては渡り廊下で繋がっている。４時限目が終わると各教室に居る教員は全員、１２校舎にある職員室へと戻り、それぞれ昼食などを済ませる。その為、１１校舎と１３校舎には職員室が存在していない。

１２校舎職員室

時刻は１３：０５、昼休み。

普段、職員室で教員達は昼休みの時間を様々な形で活用している。昼食を取る為食堂へ向かう教員も居れば、自身の机に弁当を広げる教員も居るし、授業でした小テストの採点や、プリントのコピーで時間を費やす教員の姿も見る事が出来る。

しかし、今日はそんな姿を見せる教員は1人も居ない。教員達は鬼気迫る表情で、電話を掛けたり、ＰＣに向かい執拗に何かを打ち続けている

現在、１１校舎の防災システムが誤作動し、１１校舎の扉・窓に防シ災防壁（シャッター）が下り、内部と外部が完全に遮断され、１１校舎内には大勢

の生徒が閉じ込められている状態にある

1−Dの担当教員の米川(ヨネガワ)はPCを操作し、防災装置にアクセスしようとするが、外部からハッキングを仕掛けられているらしく、全く受け付けない

「んー・・・、これはマズイな・・・」

米川は苦い表情を浮かべながら呟く

「アクセス出来ませんか、米川先生」

話掛けたのは赤いジャージを着た、若い女性教員、楠(クスノキ)　綾呼(アヤコ)である

「楠先生・・・、応援はまだ来ませんか？」

「・・・はい。連絡は着いたんですが、来るのが遅れるそうです・・・」

「・・・こんな時に・・・！！」

米川はこの上無く忌々しそうに呟く

「さっきの屋上からの爆発音も気になりますね」

「何にしても、早く何とかしないと、中に閉じ込められた生徒達が窒息してしまう」

「ち、窒息!?、何で窒息なんか・・・?」

「・・・。・・・楠先生、防災防壁(シャッター)が何の為に設置されているか、分かりますか?」

「それは・・・洪水が起きた時の浸水を防ぐ為では・・・?」

「しかし、ここ(天照学園)は山に囲まれてますから、洪水の影響は受けにくい」

「なら、どうして・・・?」

「山に囲まれていると言う事は、火災が起きた時に消防車が来るのに時間が掛かる。・・・その対策として、生徒の避難後に防壁(シャッター)を下ろす事で、校舎内の酸素を完全に遮断し、消火するんです」

「・・・！、じゃあ生徒達は・・・・！！」

楠は戦慄する。酸素が遮断されていると言う事は、当然校舎内での生徒達の呼吸が制限されると言う事だ。救助に時間がかかれば、校舎内の酸素はなくなり、生徒達の窒息死と言う最悪のシナリオも考えられる

「そう。時間的にも、非常にマズイ状況です」

闇の世界

辺りは漆黒の闇に包まれ、一片の光も射し込まない世界

そんな闇の中に白髪の少年、水無月（ミナヅキ）　理王（リオ）は呆然と立ち尽くしている

「（・・・周囲が急に暗くなったな、空間転移の類いで“飛ばされた”か・・・？）」

水無月は先程まで、得体の知れない科学者と屋上にて戦闘を繰り広げていたが、妙な金縛りに遭い、次の瞬間周囲が漆黒の闇に包まれた。科学者は“水無月を１１校舎内に閉じ込める事が目的”と話していた。その話が事実ならば、水無月の居るこの場所は、恐らく防壁で隔離された１１校舎内だろう

ピピピピッ・ピピピピッ・ピピピピッ

鳴り響く着信音。

水無月は、落雷と言う規格外の電撃を受けたにも関わらず、何事も無く着信を伝える自身の携帯電話をやや呆れながら見据え、手に取り番号を確認する

電波状況・・・圏外
表示番号・・・非通知

圏外。
恐らくは防壁が下りた影響で、電波が遮断されているのだろう。しかし、問題はそこではない、圏外にも関わらず着信が入る事など本来あり得ない

水無月は怪しみながらも、通話ボタンに指を置く

ピピピピッ・・・プッ

『ハロー、元気かい？』

声の主は、間違いなくこの騒ぎを起こした張本人と名乗る科学者である

「・・・何故、私の番号を知ってる？」

怪訝な表情を見せる水無月

『君の情報は驚く程少なかったからね、調べる必要があっただけさ』

「番号もその調べた情報の一つと言う訳か・・・」

『他にも面白い事が分かったんだ。君は“この世界”に入って６年間が経つけど・・・徐々に体内の魔力が衰えてきている様に見える』

「・・・。」

『“特殊な薬”を常用して魔力回復を図っている様だけど、回復には限界がある様だ。それに、日に日に効力は落ちてきている』

「・・・何が言いたい」

『君は日本に来て3ヶ月だけど、一度も魔術を使用しなかった、極道に銃で撃たれようと、刀で斬りかかれようとね』

科学者は水無月の問いに答えず、ただ自身の立てた推論を語る

「だから何が言いたいんだ」

『ここで1つの仮説を立てた』

『君は魔術を“使わなかった”んじゃない“使えなかった”んだ。』

『僕の推測が正しければ、君にとって魔術を行使し魔力を使うと言う行為は、自らの命を削っている様なモノだ・・・しかし、さっき惜しみ無く魔術を使っていた所を見ると、推測が外れていたのか、それとも命を懸けるに値する“何か”があるのか』

「・・・アンタの長話に付き合うのは止めだ」

平坦に無機質に響く少年の声からは殺気立つモノが感じられる

『クックク、そうだね。早くしないとゲームオーバーだ』

「ゲームオーバーだと・・・？」

『あぁ、言ってなかったね。今、１１校舎は外部と完全に遮断されている、電波・光・音・酸素、文字通り全てだ。つまり空気中の酸素にも限りがある。早くしないと君の“護るべきモノ”が窒息死してしまうよ』

科学者は嘲る。まるで、この状況を愉しんでいるいるかの様に

『因みに、僕がこうして君に電話している原理だが、君をそちらに“飛ばした”空間転移技術の応用で、電波には頼っていない。携帯画面にも圏外と出ている筈・・・』

ピッ・・・ツー．ツー．ツー

電話の向こうで、まだ何か話していたが、時間が無い為、水無月は通話を切る

（取り敢えず、ここが何階かを知る必要があるな・・・）

窓や扉に防壁（シャッター）が下り、１１校舎内は日光が遮断され、漆黒の闇に包まれていた。文字通り一寸先は闇の状況の中、一人の少女が階段前に座り込んでいた

名前は清色（キヨシキ）　鎮那（シズナ）、１ーＦに在籍。肩に掛かる程の薄茶の髪、前髪には三葉のクローバーの髪留めを付けている。報道部に所属

「うーん、参ったッスね・・・」

清色は左足首を擦りながら呟く

警報がなり、防壁（シャッター）が下りて校内が闇に塗り潰された時、清色は丁度階段を降りていた為、驚くと同時に足を踏み外し、下の階まで豪快に転げ落ちてしまったのだ。しかし、階段から落ちたにも関わらず、左足首を軽くひねった程度で済んでいる所を考えるとかなり運が良い方なのかも知れない

その時、階段を降りる足音が清色の耳に入る

階段に目を向けると、火の玉サイズの球状の発光体が宙にふわふわと浮いていた

（・・・！！！、まさか・・・火の玉？それとも未確認飛行物体ッスか！？）

清色はビッグスクープか！？、と報道部の血が騒いだらしく、発光体を凝視する・・・が、どうやら発光体はそう言った特殊な物ではなく、暗闇を照らす為に出した光系統または炎系統の魔術の一つの様だ。よく見ると発光体は術者と思われる人影に引っ付いて移動している

（・・・なんだ、単なる明かりッスか）

そんな事を考えていると、人影は清色の存在に気付いたのか、僅かに静止する

「光系魔術ッスか？、見事なもんスね」

「・・・・・。」

清色はなんとなく話し掛けるが、沈黙が走る

（・・・無視ッスか！？）

清色の心の中で、ガビーン！と衝撃音が響くが、返事は少し遅れて返ってきた

「・・・変な質問ですが、ここが何階か分かりますか？」

平坦に無機質に響く声。声色から少年と言う事が伺える

「・・・二階ッスね、そっちも階段から落ちて感覚狂ったんッスか？」

「・・・そんな所です。では、情報に詳しい方をご存知ですか？」

「ウチは報道部で情報には詳しいッスけど・・・アンタ、教員って訳じゃ無さそうッスね、１年生ッスか？」

まるで情報収集でもしているかの様な質問に、清色は僅かに警戒する

「・・・えぇ、一応Ｄ組に在籍しています」

（“一応”って単語が気になるッスね、少し探りを入れて見るッスか・・・）

「・・・それで、何の情報を知りたいんッスか？」

清色はさりげなく、相手の情報を引き出そうとするが、少年はまるで隠す必要性が無いかの様に軽い調子で答えた

「窓や出入口の扉に下りた防壁についてです」

１３：０７

１２校舎

扉に２ーＱと記された教室では、１１校舎から響き渡った轟音の話で持ちきりだった。

ざわざわと騒がしい教室で、一際テンションを上げている少女の姿がある

「こよみ、こよみ。これは大事件ニ違いナいよ～♪」

猫なで声で騒いでいるのは、観月（ミヅキ）　瑞羽（ミヅハ）と呼ばれる小柄なツインテールの少女

「不謹慎だよ、ミヅハ」

答えたのは、山吹（ヤマブキ）　暦（コヨミ）と呼ばれる大和撫子を思わせる長い黒髪に青いカチューシャを掛けた少女である。

「こよみは相変わらずお堅いネ～。でもさ、でもさ、爆発音が響いたり、急に曇ったと思ったら雷落ちたり。絶対１１校舎で魔術バトルとかやってるよ」

「・・・魔術戦は校則で禁止・・・」

二人が話していると、藍色のローブを被った少女が割り込んで来た

彼女は同じく２ーQに在籍する芦屋（アシヤ）　冷夢（レム）。ローブ（学園規定の物）を深々と被っている為、髪型や表情は分からない、パッと見占い師の様な風貌である。

生徒会に所属し、書記を担当している

「ナはは、半分ジョークだよ、せんちゃん♪」

「・・・その、占ちゃん（せんちゃん）って呼ぶの、やめてほしい・・・」※見た目が占い師に見える為、占ちゃんと観月が命名

芦屋は、ぼそぼそと呟くが、観月はナははと笑うばかりで全く聞く耳を持っていない。

それを見かねた山吹は、

「芦屋さん、うちのミヅハがすいません」

と、まるでお母さんの様な台詞で謝っている

芦屋は、「べつに、あなたが謝る必要は・・・」と、ぼそぼそと呟く様に答え、

「・・・本当に、魔術戦なら、止めないといけない・・・」

芦屋の声に力が入る。表情はローブに隠れ、見る事が出来ないが、恐らく決意に満ちた表情をしている事だろう

「お♪せんちゃん、１１校舎ニ殴り込み？、いいネ～♪生徒会執行部見たいナ感じで、こよみと一緒に付いてくよ♪」

「ちょっとミヅハ、なに勝手な事・・・」

「・・・執行部じゃない・・・」

そんなこんなで、三人は１１校舎へ向かうのだった

１３：０８

「・・・防壁って、防災防壁（シャッター）の事ッスか？」

前髪に三葉のクローバーの髪留めを着けた茶髪の少女、清色　鎮那は確認を取る様な調子で聞き返す

「正式名は知りませんが、多分それです」

「そんなの知ってどうするんッスか？」

「壊します」

少年は簡潔に一言でとんでもない事を答えた。
清色は、予想の斜め上な回答にポカンと口を僅かに開き静止する
実を言うと、清色はこの得体の知れない少年を、この事件を引き起こした犯人なのでは？と考え、あわよくばスクープと淡い期待さえ寄せていた。

しかし、この少年は防災防壁（シャッター）を下ろすどころか壊そうとしている、いままさに別の事件が起きようとしてるんじゃないのか？と清色は思わぬスクープの予感に胸を踊らせる。
そんな清色の心的状況を知るよしもない少年は、

「出来れば、何に弱いとか、どの位の衝撃で壊れるら等を詳しく」

「ぶっちゃけ、壊すのは諦めた方が良いと思うッスよ。魔術の類いは一切無効、それに加えて、核弾頭の直撃にも耐えうるっつーアホみたいな強度ッスから」

「そうですか、・・・では、放送室の場所への案内をお願い出来ますか？」

この少年は一体何を考えているのか、防壁の弱点を聞いてきたかと思えば放送室への案内を頼んできたりとあまりにも脈絡が無い

「・・・案内したいのは山々ッスけど、足首ひねってて歩けないんスよ」

清色は左足首を擦りながら答えると、少年は無言で清色の身体を抱えあげようとする

清色は

「えっ、ちょっと！？」

と意表を突かれた様な声を出すが、少年は気にしていない

横抱き・・・俗称『お姫様抱っこ』を謎の少年にされている清色は

「ちょっと、待つッス！一体どんな状況ッスか！！とにかく降ろして下さいッス！！」

少年の腕の上で、バタバタと子供がただをこねる様に暴れる清色。
しかし、当の少年の方は全く聞いておらず
「放送室への案内をお願いします」
と、平坦な調子で尋ねている。
「あ、案内するッスから、取り敢えず降ろして下さいッス！！！」
少年は僅かに溜め息をつき、清色を優しく降ろす
「下ろしましたが・・・どう案内する積もりですか？」
少年は平坦な調子で尋ねるが、清色は若干げっそりとした表情で
「保健委員に回復魔術の得意な知り合いが居るんスよ。電話するんで、少し待つッス」
そう言うと、清色は三葉のクローバーのキーホルダーの付いた携帯電話を取り出す
「ここ圏外ですよ」
少年の言葉に
「何言ってんスか」

と適当に答えながら携帯画面を確認する

電波状況・・・圏外

「・・・・・・。」

「・・・・・・・・・。」

僅かな沈黙が走る

「・・・何故ッス！？、一体何がどうなってるッスか！！？」

軽くテンパっている清色に対し、少年は落ち着いた様子で

「防壁が下りた影響で、電波が遮断されているらしいですよ」

「それを早く言うッス！！」

随分と理不尽な要求だが、少年は大して気にしておらず、再び抱え上げる体勢に入っている

「ちょ、なに無言で『お姫様抱っこ』しようとしてるんスか！？」

「時間が無いので、早く案内して欲しいのですが」

「それは重々承知してるッスけど、『お姫様抱っこ』は断固拒否するッス」

「・・・我が儘ですね」

少年は明後日の方向を向きながら呟いた

同時刻
１１校舎屋上

そこには、白衣を羽織った見た目２０代前半～後半の科学者風の男が、携帯電話を片手に悠々と会話を愉しんでいた

「ハロー、元気かい？」

『・・・・・。で、要件はなんな訳？』

声の主は、男とも女とも判別つけづらい声色で、ダルそうに答えている

「ツレないね～。今回の君の働きは大きいからね、感謝の言葉でも、と思ってね」

『別に給料分働いただけなんだけど。勘違いして欲しくないから言うけど、別にアンタの考えに賛同した訳じゃないから。そこんとこ重要な訳よ』

「それは勿論、重々承知しているよ。これからも“雇う者”と“雇われる者”、この関係は崩したくないからね」

『分かってるなら良いけど、あと次は敵かも知んないから、そこんとこも理解して欲しい訳』

「ククッ、分かっているさ、凄腕クラッカー君」

『・・・ハッカーだし』

ブツンッ・・・ツー・ツー・ツー・

電話相手はその言葉を言い残すと、カンに障ったのか通話を切った

一方的に通話を切られた科学者は僅かに苦笑を浮かべ、防壁の下りた扉へ目を向け、一言呟いた

「・・・足止めも楽じゃないね」

１３：１０

１１校舎三階廊下

『お姫様抱っこ』を断固拒否していた清色　鎮那は話し合いの末、少年の背中におぶってもらうと言う結論に至り

現在、清色は不服そうな面持ちで少年の背中に身を任せている

「そこの階段を昇るッス」

静寂の中、清色の声と足音だけが響く

「ところで、現役女子高生の身体が密着してる訳ッスけど、現役男子高生として、なんか感想は無いんスか？」

「・・・、そうですね・・・高校生の割には随分と慎ましやかな胸で・・・」

ゴスッ・・・

少年が言い終わる前に清色の頭突きが炸裂した

「次言ったら、生まれてきた事を後悔させるッスよ。」

「・・・了解。」

「あ、・・・ここッスよ、放送室」

どうやら話している間に到着したらしい

少年はドアノブに手を掛けるが、ガチャガチャと音をたてるだけで

扉は開かない

「鍵掛かってる見たいッスね」

「その様ですね。」

ガッ・・・ガキーン

その言葉が引き金となるかの如く、鈍い効果音が廊下に響き渡る

「え〝・・・」

「さて、入りますか」

少年は何事も無かったかの様に扉を開ける

「ちょ、待つッス！なにしてんスか！？」

「扉を開けただけですが？」

「その前ッス！！それまでの過程がおかしかったッスよね！？」

「細かい事は気にしたら負けです」

もしかすると、自分は今まさに、この少年の共犯者的立ち位置にいるのでは？と清色は若干本気で心配する

「・・・、でも、放送室で何をする気ッスか？電気は通ってないみたいッスけど」

「“その程度”の事なら問題ありません。」

ところで、と少年は句切ると、

「この学園には錬金術部と言うモノがありますか？」

5話　棒読の暗闇廊下（後書き）

最後まで読んで頂いた方、この様な駄文に付き合って頂き、誠に有り難う御座います。
リアルの方で忙しく、次話投稿するのがかなり遅くなってしまった事、深くお詫び申し上げます。
文才の無い筆者ですが、これからもどうぞ宜しくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8169w/

棒読の水無月

2011年11月7日18時22分発行